

令和2年1月24日

関係各位

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学講座  
教授 片瀬秀隆

拝啓

56年ぶりの東京オリンピック・パラリンピックに日本中が徐々に熱を帯びてきています。昨年10月7日に東町に新築・再開院した熊本市市民病院の産科・婦人科も教室や連携施設から異動された5人のベテラン・若手医師の活躍で順調に運営されています。報告では、再開から1月21日までの分娩数は46例（帝王切開率：52%）で、昨年末までの婦人科がんの手術数が9例、新規化学療法が4例で、新年に入り既に7例のがん患者さんが受診され、1月の総手術数は30例を超える予定で、1日の外来受診数は約80例とのことです。連携施設各位のバランスのとれたご支援に感謝申し上げます。

掌編小説の神様と呼ばれた星 新一は、私たちの若い頃には小松左京、筒井康隆とともにSF御三家でした。父親は星薬科大学の創立者で、森 鷗外は大伯父です。私が医師になった昭和57年に発行された星の『未来イソップ』の中に「新しい症状」というSFショートがあります。その冒頭をそのまま抜粋します。

最新の設備を誇る病院があった。どこが最新なのかというと、大きく精巧なコンピューターが導入され、それが活躍しているのだ。それが患者を診察し、たくわえられている各種のデータとの照合を自動的にやり、たちまちのうちに診断が下される。それは正確で、人間の医者の場合に起こりうる、不注意や先入観による診断ちがいがいなど、まったくなくなった。患者は大ぜい押しかけるが、スピーディーに処理されるので、待たされるという不満はない。そして、適切な治療を受け、薬の処方をもらい、時には入院し、健康にもどる。申しぶんない成果をあげている。

コンピューターの小型化を除くと、40年前には夢の世界だったこのSFがまさに現実となりつつあります。1滴の血液でがんの早期診断がなされ、がんゲノム解析で最適な薬物療法が選択され、エピゲノム解析では発がんリスクや予後診断までも可能になりつつあり、いずれもAIが参入しています。今世紀中には百寿社会が到来するというのもあながち言い過ぎではないのかも知れません。しかし、このショートの結末は「コンピューターアレルギー」という新しい症状を指摘したある意味怖いイソップ物語です。

2月と3月の予定表を同封致しました。3月8日（日）午後、熊本市医師会館で今年も詩人の伊藤比呂美氏の「ライブ！女の一生」をメインに市民公開講座を開催します。

敬具